
人生終了のお知らせ

社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない

上上 上

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

人生終了のお知らせ　　社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない

【Zコード】

N5530N

【作者名】

上上上

【あらすじ】

この世に生きる人間たちは、次々と人生終了のお知らせを受けてゆく。それは社会的地位の消滅であったり、社会的地位の消滅だつたり。

これは、そんな者たちの死に様を描いた物語。

感想とか評価とかしてくれると嬉しいです。

プロローグ「セクハラ男」

ああ、やつちました。

俺は人間失格だ。

何故かつて？

聞きたいか？

おっぱいを揉ましてくれたらいいぜ。

え？ 「俺は男だ」 つて？

そりや失敬。

つて……、またやつちました。

俺は今こういうセクハラ発言が訴えられて、警察の「厄介になつて」ところなんだ。

クソッ、通りすがりの美人女性に「パンツは何色ですか？」と訊いただけでこうなるなんて、嫌なこの時世だぜ。

だいたいあんな短いスカートなんか履いてるから悪いんだろうが

!!

男を挑発しやがつて！！

まあ、俺も悪かった事は認めよう。

だがお前ら女共が挑発するから、こんな事になつたんだからな……

これに懲りて、俺がムラムラするようなファッショントするんじ

やねえぞ！！ いいな！？

つて、ああ……。まだ。

こうやってセクハラで訴えられて、逆ギレして、また訴えられて。

このループが止まらないんだ。

どうすりやいいんだよお……。

……結局、罰金とられたし……。

まあ、懲役何年とかにならなかつただけ、よかつたとするか。

よし……

気分を入れ替えよう……！

まずは巨乳美女を見ないと気分を入れ替えられない。

お。

美女はっけーん。

俺のセンサーが反応してるぜ。
つていうかスカート短エ。

うーん……。

パンツ、何色だらう。

よし、じゃあ。

单刀直入に聞いてみるか！！

終わらない、エンドレスなループ。

それには絶対的な力が働いていて、抗う事は出来ない。
運命で決まっているのだ。

こんな人生でいいのかつて？

そりや、いいわけが無い。

何回も何回も警察の御厄介になつて、それでも運命は変わらなくて。

自分に嫌気が差すさ。

でも、どんなに自己嫌悪しても、どんなに抗おうとしても、
変えられない物は変えられない。

俺はそれを知っているから、だから。

もう割り切つて、自分の本能に従おうと思つ。

今日も世界は廻つてゐる。

一人の男が、セクハラを続けながらも。

セクハラした相手が、友達のお姉さんでも。

セクハラ男の社会的地位 END

それから一ヶ月後。

友達は、自分の姉をセクハラされた怒りにより、セクハラ男をネット上に晒しあげた。

人生終了のお知らせを通達されたセクハラ男は、今もムショの中でくさいメシを食つてゐるといふ……。

第一話「全ての始まり」

砂埃が舞う荒野を背景に、二人の男が対峙していた。

一人目の男は、温厚そうな顔だが、今は目には強い決意を帶びて、口も閉じている日本人だ。

白い柔道着を着ていて、その隙間から筋肉が覗いている。
20代前半だというのに、飾りつけはまったく無く、髪の毛も全然染めていたりしていらない黒髪だ。

対するもう一人は、柔道着の日本人とは対照的にキツイ目つき、口元にも笑みを浮かべているアメリカ人。

ファッショングセンスも凄いが、筋肉も凄かつた。

柔道着の日本人とほとんど変わらない、もしくはそれより凄い筋肉。

背も日本人より高く、上から見下ろすような形になっていた。

荒野の風が、彼の金髪を揺らす。

その時、突然『すりー、つー、わん、……』とカウントダウンが始まった。

そして、『れえでいい ふああああいいとおおおおおお』とやたらテンションが高い声が聞こえる。

すると対峙する彼らは、互いに向い一気に駆けた。

まずアメリカ人が、日本人との距離約3メートル程のところでジャンプする。

空中を日本人に向かつて飛んでいるアメリカ人は、容赦無く飛び蹴りをかます。

だが日本人はそれを両手をクロスしてガードし、そのまま脚を掴んで振り回した。

十分なスピードが付いたところで、脚を離す。

ブワッと空中を浮いたアメリカ人は、器用に体を空中で回転させ、見事に着地した。

だが着地した時には日本人は既に拳を振りかぶっている。

物凄いスピードでアメリカ人に吸い込まれてゆく拳は、アメリカ人の飛び蹴りと同じように容赦の欠片も無い。

「ゴオ！！」と聞こえてきそな程上手く決まつたパンチをした

日本人は、すぐに第一撃目の準備をする。

が、アメリカ人の脚が日本人に向かっていた。

靴のつま先が日本人の頸に叩き込まれた。

日本人は威力に耐えられずよろめく。

アメリカ人は殴られたダメージを感じさせぬ程のスピードで、第一撃、第二撃目を加えてゆく。

左アッパー、右アッパー、左アッパー、右アッパー……と、何故かアッパー限定で攻撃を加える。

日本人のHPはどんどん減り、最後の一撃とばかりに右ストレートを食らつたところで「zero」になつた。

「だア ッ！！ くそッ！！」

俺はコントローラーをクッショוןに投げつける。

クッショൺに激突したコントローラーは、やや左に跳ね返りちゃぶ台の上の緑茶に当たつて、熱々のお茶を撒き散らしたところで落ち着いた。

「危ねッ！！」

俺は慌てて湯呑みを抑えようとしたのだが、間に合わなかつた。

「クソオ……」

もうこのゲームは飽きた。

処理速度は遅いし、グラフィックは悪いし、しかもゲームバランスおかしいし。

イライラを隠せない俺はテレビゲームの電源を切り、代わりにパソコンの電源を点ける。

部屋が小さいので動かずとも電源を点けれた。

だが、このパソコンももう古いで起動速度があまりにも遅い。ウイーン……と冷却ファンが、今はとてもイライラする。物にあたつても仕方ないといつのこと、どうしても物にあたつてしまふのは俺の悪い癖だ。

思わずふすまに拳を叩き込んでしまった。

思いつきり凹んだふすまは、中に収納されている物を雪崩のようになに落としながら、その物たちの上に倒れた。

「あ～……」

片付けるのが、また面倒くさい。どうしよう。

と、この惨事の原因、パソコンがやつと起動した。俺はとりあえずネットサーフィンでもして時間を潰そうと思つ。インターネットのアイコンをダブルクリックし、表示されるのを待つが、どうせ遅いのはもう分かっているので、心を落ち着けつつ雪崩の処理をした。

「酷い……」

買っただけで、全然使っていないものがたくさんあつた。今では何故こんな物を買ったんだ、あの時の俺よ……と思つよう。

な物が盛り沢山。

はあ、とため息をつきながら、それらを押し入れの中に押し込んでいく。

三分の一の物を押し込み終わり一息ついた隙にもう一度雪崩が起き最初の状態に戻った時、ふと一つの箱が目に付いた。

電気屋で購入したウェブカメラ。

ライブチャットするぞと意気込んでいたのだが、その時丁度パソコンが破損し、修理に出してしまいましたかり忘れてしまっていたのだ。

そもそもまだ高校生の俺にはアダルトサイトはアクセス出来ないし。

だけど何か色々使えるかもしない。自作監視カメラとか。

ウェブカメラを手に持つたまま俺はパソコンの前に戻った。
と、yaf oo - ニュースが更新され、新しいニュースが表示されている。

その中に面白い一文を発見した。

“友人の姉をセクハラし、ネットに個人情報晒される”
俺は吹き出しそうになつたが、ギリギリでこらえる。

こらえてから、別にこらえる必要無いじゃんと思ったが。

とりあえず後で見ようと思い、別のタブに表示させておく。

砂時計が無くなり、やつと自由に動き回れるようになつた俺のマウスを移動させ、yaf oo の検索エンジンに『ウェブカメラ』と打つた。

Enterキーを押す。

そして数秒後（動作遅い）には様々な検索結果が表示されていた。
一番上に表示されたwikipediaをクリックして開く。

ふむふむ、分からん。もつと分かりやすく書いてくれよ。

そもそも俺はウェブカメラの何を分かろうとしているのだ？

分からぬまま読み進めるうちに、色々な使い道がある事を知つた。

yaf oo メッセンジャー、Google Talk、Skype、
youtube、ニカニカ動画の生放送、……などなど。

中でも俺はニカニカ生放送が気になつた。

生放送。なんだかカツコイイ。

ニカニカ動画自体は知つていてる。

アカウントも実は持つていてる。

しかし最近アクセスしていない事を思い出し、久しぶりに行つてみる事にした。

ニカニカ生放送のユーチャー放送はミレニアム会員じゃないと出来ないらしい。

ミレニアム会員は月525円だと。
ちと高い。

だが、ミレニアムチケットというのもあるらしい、試しにそれでミレニアム会員になつてみようかなと思つ。

だつて生放送やってみたいんだもん。

俺は、テレビゲームにも飽きてきてる。新たな刺激が欲しかつた。

「……やってみるか……」

俺は登録手続きの画面に移動した。

第一話「全ての始まり」（後書き）

yaffoo（笑）。

Google（笑）。

二力二力動画（笑）。

何か色々違います（笑）。

本当は一話完結みたいな感じにしたかったんですが、もう疲れた
んで続きはまた今度……と、いう事で。

最初のゲームの描写は別に必要無いんじゃない？ と思う方も居
るとおもいますが、ていうか実際要りませんが、なんとなくバトル
シーンっていうのもやってみたかったんです！！

今は反省します。

第一話「アキバハラ48、ベヒーローテーション」

登録手続きと言つても、もうアカウント自体は持つてるので、
ミレニアム会員の手続きだ。

webコマネーというものでチケットとやらを買い、それで90
日間ミレニアム会員になる。

webコマネーはファミリマートなどのコンビニで購入出来る
らしい。

俺の家の近くにあるのすぐ隣に行ってきた。

まあ、後はこのwebコマネーでミレニアムチケットを買つだけ
だ。

webコマネーの番号を入力し、決定ボタンをクリックする。
よし、ミレニアム登録完了。

けつこつ簡単だったので、少し拍子抜けした気分になる俺だが、
これで生放送とやらが出来る。

あれ、ちょっと待て。

生放送ってどんなのを放送すればいいんだ？

勢いに乗つてミレニアム登録してしまったが、焦つて放送事故な
んてしてしまつたら、恥ずかしすぎてアカウントを削除してしまつ
かもしねない。

ちゃんと前情報を収集しなければ。

そう思い、生放送のページに移動した俺は、適当なタイトルをク
リックした。

画面が表示される。

既に放送開始から1時間程経つてゐるようすで、コメントもかなり
いい感じになつてゐる。たぶん。

おそらくこれは公式の生放送だらつ。

ちょっと見るが、なんだかよく分からないので戻るボタンを押す。
やっぱつこいつのは最初から見ないとダメだな。

と、いう事で、新着ユーザー放送の中から適当に一つ選ぶ。映像が表示されると、よく分からない人が踊っていた。

これは俗にいう『踊つてみた』というヤツなのだろうか。

画面の向こうで踊つている人物の踊りは、けつこう上手かつたのだが、俺の方が上手く踊れる気がする。

実は俺はちょっとダンスをかじつているのだ。

まあ、経験者の俺から言わせれば、この踊り手はクズだね。だが意外と人気があるようで、まだ始まって数分なのに、けつこうな人数が見てているようだ。

アンチや信者もいるようで、なんだか賑わっていた。

もし、『コイツじやなく自分が踊つたらどうなるだろうか。たぶん、俺のほうが人気が出るだろう。

だつて俺のが上手いもん。

だが顔出しじやつても大丈夫だろうか？

高校では、どっちかと言うとおとなしい系のグループにいる自分が、こんなところで踊つてているのを公開してクラスの奴らに見られたら、たぶん引かれるだろう。

限りある青春時代。

それをこんな事で壊してしまつたら馬鹿みたいだ。

いやでも、この画面の向こうの俺より踊りが下手な人も、顔出しひいてるから、けつこう大丈夫なのだろうか。

……ちょっと、やってみようかな。

準備はGogo-e先生のおかげですぐ整つた。

後は生放送の時間が来るのを待つだけだ。

生放送開始の時間は午後10時。

現在午後9時。

後1時間。

長い！！

1時間もじつやつて緊張して固まりながら待たないといけないのか！？

ちょっと予行練習に踊つてみるか。

パソコンからビデオを流す。

曲はAKB48（アキバハラ48）の『ベビーローテーション』。

女性アイドルグループの曲だが、まあ別にいいだろ？

服装は、AKB48（アキバハラ48）の衣装に似せた物。

高校の文化祭でクラス全員で踊つたのだ。

だから振り付けも完璧（たぶん）なので、この曲にした。

パソコンのスピーカーからポップ調の音楽が流れる。

ちなみに歌詞を歌つてしまつと、俺の音痴さに視聴者のみなさんも、顔を歪めると思いますので、やめさせていただきます。

部屋の荷物を別の部屋に押し込み、踊るスペースを作つた狭い部屋で、くるくる踊る。

所々間違えながらも、全部踊れた。

後は間違えたところを、映像を見ながら微妙に直していく。

まあちょっとぐらいい間違えたつて別にいいと思うけどね。

問題は男が踊つているのを気持ち悪がられないかどうかだ。

十中八九気持ち悪がられるだろうが。

まあそれはネタだしいいか。

他の問題は、ベビーローテーション以外に何を踊るかだ。

最近の曲で踊れるのは、ベビーローテーションぐらいしか無い。

ああ、無計画だなあ。

まあ今更悔やんでも仕方が無い。

その時はその時で適当になんか踊るか。

リクエストにも応えたりしようかな。

さあ、そんなこんなで午後9時59分59秒。

一気に時間が飛んだけど、細かい事は気にならない！

後1秒で生放送開始。

つて、ああもう始まつてたわ。

でもまだ誰も来てないからいいよね。

じゃあ誰か来るまでこの生放送の詳細を話そつか。

『タイトル：なんか色々踊つてみた。説明：なんか色々踊ります。初めてですがよろしくお願ひします。』

以上。

俺はこういうタイトルとか決めるのが苦手なんだよ。おつと、こつの間にか数人が来ている。

ちょっとカメラのマイクに声を出してみよう。

「あ～、マイクのテスト中。聞こえましたら適当にコメントしてください～」

言い終わり、数秒後、ちゃんと聞こえたようでコメントが返つてきた。

『聞こえますよ』

『つてか主イケボ w 顔はともかく w』

失礼な。

『歌うんですか？ w』

おお、それなら歌つてもいいかもしね。そんな事を思つてしまつたばっかりに、

「歌います」

と、言つてしまつた。

言つてから、歌詞ほんと分かんねえじゃん、と氣付く。

『おお w 踊つてしかも歌うんですか w w』

ああ、もう後戻り出来ねえや。

ま、俺の音痴もネタとして受け取つてくれたらそれでいいけどね。

『すげえ w』

『楽しみ w』

『つてかいつ始まるの？』

おつと、もうそろそろ始めないと、視聴者が待つてているな。

来場者数はそんなに無いが、コメントはけつこう賑わつて来ている。

俺は一つ深呼吸をし、
「それじゃ、行きまーす！ー！」
と宣言した。

それが死の宣言だとも知らずに。

第一話「アキバハラ48、ベビーローテーション」（後書き）

アキバハラ48、ベビーローテーション。

微妙に変えてるぜ！！

この二つはパツと見違うのか分かんねえだろーーー？

頑張つて考えたぜ！！

第二話「スッキリとした気分でゲームをプレイしよう！」

パソコンに、生放送の画面とは別に、アキバハラ48の踊つてる動画を表示させる。

その際、録音されている歌声も聞こえてくるが、俺の声で書き消せばいいだろう。

「1、2、1234！！」

俺はけつこう大声で叫ぶ。

そして音楽が始まった。

急いで片付けた部屋の中で踊る。

衣装もちゃんとアキバハラ48のフリフリな文物を着ているので、何だか恥ずかしい。

ちなみにスカートの中はトランクスです。

『今パンツ見えたww』

このコメントは見なかつた事にしよう。

『歌は下手だけど踊るの上手いww』

褒められて、ちょっと嬉しくなる。

この生放送を視聴してる人は、二カ二カしてくれているのだろうか。

二カ二カしてくれていたら嬉しい。

なんだか『w』とかのコメントが増えた気がする。

これは二カ二カしてくれている証拠だろうか。だつたらいいな。

『ベビ　イ、ロオ　テエ　ショ　ン』

最後まで歌いながら踊りきり、ふう、と一息つく。

『おつかれー』

『乙』

などのコメントも見られた。

俺が踊っている間にもけつこう来たようで、かなりの来場者数に

「メント数だ。

「あ、疲れた」

俺は思わずつぶやく。

そして、ハツと思い出す。

……次、何踊るつ……。

ベビーローテーション以外には考へていなかつたので、はつきり言つてヤバイ。

この状況をネタ切れというのか。

しかしここで開始してから7分程しか過ぎていない。

生放送は全部で30分。残りの23分は何をしようか。

俺の心境とは裏腹に、メントはどんどん賑わっていくようだ、

『次、何踊るのー?』

とかコメントしてる輩もいる。

「何か踊つて欲しいの、リクエストとかありますか?」

俺は苦し紛れにそう訊いてみた。

『何かつて言われても、主さんが知つてゐるかどうか分からぬし』

『分からなかつたら、アドリブで踊ります』

うん、それがいい。

『じゃあ、しょね初音ミクの『ミックミクにしてあげる』がいい

それは俺でも知つてゐる。

けつこう有名だろう。

『じゃあ、『ミックミクにしてあげる』をアドリブで踊ります。その音楽を流しますので、ちょっと待つてください』

それから1分程経つて、準備が整つた俺は、

『開始します』

と声をかけ音楽を流した。

「ふう」

30分の生放送が終わり、俺は額に滲む汗を拭う。

もうちょっとでクリスマスだが、部屋の中は暖房を入れているので、運動すると暑かつた。

生放送を終えた俺は、手応えを確かに感じていた。

けつこう反響も良かつたし、このまま生放送を続けていれば、俺のユーザー名の大百科記事が出来るかもしれない。

大百科とは、ニカニカ大百科と言い、ミレニアム会員は自由に記事編集出来る。

自分で作るというのもアレなので、ファンと記事が出来るのを楽しみにしておこう。

「ちょっとゲームでもしようかな……」

「ここから下は読み飛ばしてもうつて構いません。

砂埃舞う荒野。

因縁の二人が対峙していた。

彼らは何度も何度も戦つてきただが、今まで決着が着かず、ここまで二人とも死なないでいたのだが、今回でどちらかが死ぬのは明白だった。

日本人の手には、スタンガン。バチバチと火花が散り、電圧の高さがうかがい知れる。

アメリカ人の手には、刃渡り20センチ程のナイフ。アレで刺されれば無事では済まないだろう。

何だかどつちも卑怯な気がするが、仕方無い。

人生は不条理極まりない、そんなものなのだ。

つまり、相手が武器を持っていたって、仕方の無い事なのだ。まあ今回はどうちも持つてただけいいじゃないか。と、いう事で戦いが始まった。

まずアメリカ人がナイフを前に突き出し走り出した。対して日本人は受けの構え。

アメリカ人は走りながらナイフを一閃。

しかし日本人はギリギリでそれをかわす。

かなり危なかつたが、ギリギリでよけたのはわざとだ。

ギリギリでよける事によつ、無駄な動きを取らないで済む。

そしてまつたく無駄の無い動きで、スタンガンをアメリカ人に押

「グギュアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアツツツツ！！！」

アメリカ人は悲鳴を上げ、氣絶した。

だが、まだアメリカ人のHPは残っている。

日本語なめくじ
拳を握り締め力

読み飛ばすのは「」までです。

「わあ……！」

スッキリした気分で今までクリア出来なかつたゲームをプレイする
と、ちゃつかりクリア出来た。

凄い、凄いぞ、二力二力生放送。

二力生のおかげでの無理ゲーをクリアする事が出来た！！
感謝するよ。二力生。

なんだかんだで、俺はまた生放送をしようと思ひ。

六

暗い部屋の中で、一人の少年が驚愕していた。

「今... ... ! !」

たまたま見た一力一力生放送。

そこに映つていたのは……

*

翌日。

月曜日。

学校に行くのが憂鬱だ。
だつて寒いし。眠いし。
まあ内申が悪くなつては困るので、イヤでも行くけど。
急いで準備をして、家を出る。
寒空の下、早足で高校への道を行く。

（道中は割愛します）

俺は教室の扉を開ける。

「……」

俺は黙つて教室に入るが、クラスメートたちも黙つた。
喋つていた人も、歌つていた人も（教室で歌うな）、踊つていた人も（教室で踊るな）、PSPの新しいやつで対戦してた人も（学校にゲーム持つてくるな）、プリンを取り合つていた人も（おやつを持つてくるな）、一瞬にして沈黙する。

「……？」

何故黙る？

俺が何かしたか？

「あの……阿部くん……」

何故敬語？

そして何故俺と目を合わそとしない？

ちなみに阿部は、今考えた俺の仮の名前です。

「さつき聞いたんだけど……」

「ん？」

「二力二力動画で踊つていたって……本当？」

第三話「スッキリとした気分でゲームをプレイしよう」（後書き）

間のゲーム描寫は別に必要無いんじゃない？ と思つ方もあると思うが、大丈夫です。俺も必要ねえかもと思つてます。

第四話「言い訳」

「二力二力動画で踊っていたって……本当？」

「…………」

クラスメイトからの視線が痛い。

「え……と」

全員から注目を浴び、ここまで注目されたのは生まれて初めてなので、上手くしゃべれない。

「…………」

「…………」

ガラツ

「ホームルーム始めるぞー」

硬直した空気が動き出した。

俺に注目していたクラスメイトたちも席に座る。

「何してるんだ？ 阿部（仮名）」

先生に言われた俺は、急いで席に着席した。

どうしよう。

二力生で踊った事がバレてしまった。

しかも女性アイドルのフリフリドレスを着て。

これは恥ずかしいぞ。かなり。

どうやつて言い訳しよう。

あれは俺じゃないと言い張るか？

そうだ、それがいい。

そんなに画質もよくないだろ？ し、見間違えだと言い張れる。

生放送だから、後から確認も出来ないし。

よし、これでいい。

チャイムが鳴り、一時間目の授業が終わった。

「おい、阿部（仮名）、二力二力の事、どうなんだよ？」

「えと、あれは……俺じゃないよ」

考えていた通りの事を言つ。

「やっぱりな。お前なんかが踊りを踊れるワケ無いもんな」話しかけてきた男子は、ため息をついて、自分の席に戻つていつた。

何だかムカツクが、バレてはいけないので我慢だ。

そして他にも事情を聞いてきたクラスメイトに、同じ事を言つた。皆、一様に納得し、自分の席に戻る。

これで大丈夫、一件落着。

そう思つていた。

この時までは。

*

「阿部（仮名）はなんて言つてた？」

昨日二力生を見て、それをクラスメイトたちに広めた張本人である少年が訊く。

「『あれば俺じゃ無い』ってさ」

答えたのは、本人に訊いてきた生徒。

「そうか……」

（いや、ちょっと待てよ？『あれば俺じゃ無い』って事は、まるで二力生を見ていたようじゃ無いか……）

*

第四話「言い訳」（後書き）

今日はちょっと短いです。
たぶん。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5530z/>

人生終了のお知らせ　　社会的地位なくしては、俺たちは生きてはゆけない
2011年12月31日16時45分発行